

対象の不在という観点から見た不登校

—ここにはいない対象のいるところ—

恒 吉 徹 三

On Non-attendance at School from the View Point of Non-Existence Object :

Where the Non-Existence Object Exist.

Tetsuzo TSUNEYOSHI

(Received September 27, 2002)

I. はじめに

本稿では、不登校現象を対象の不在という観点からとらえ直すことを目的としている。不登校の児童や生徒は、教室という場面では、そこにはいない誰かのことである。つまり、登校している児童や生徒、教師の内的世界において、そこにはいない誰かは存在しているのとらえることもできる。この内的世界に存在している対象が、外的世界では不在であるので、これを対象の不在としてここでは表現する。このような観点からとらえるとき、内的には対象として存在しているこの誰かがいないことは、大きな存在感をもっているという逆説的な観点からとらえることの意義について本稿では論じることにする。

つまり、学校というある外的世界の中には不在の対象であるが、多くの子どもたちは自宅におり、フリースクールや適応指導教室などで自らの存在の場を得ているのである。つまり、不登校の子どもたちは、あるところには不在の対象として、あるところでは存在している対象であるという2面性を備えているのである。この2面性は、教育の場をより多様化させる結果を生んでいる。ただ、義務教育という期間にあつて、学校場面にはいないことから問題視されることになるが、この対象の2面性からとらえると、文部科学省が、インターネットによる学習も認める方向で動き出したことは、学校という場面にはいない対象がいるところでの教育、という転換を図ったものとして理解することも可能にする。社会的にみても、学習の場や機会はより一層公式にも多様化し続けていることの現われとしてとらえることができる。

II. 子どもたちの発見としての不登校

1. 登校することの位置づけの変化

これまで学校は登校できることが当たり前のことであったし、行くべきところでもあったし、これを疑うことも少なかった。しかし、全国でわかっているだけでも14万人近い児童・生徒が不登校という状態にある現在、簡単に学校は義務教育だから行くべきところ、行かせるべきところ、行って当たり前のところだとして、行っていないことは悪いことである、とは言えない状況となっている。学校へ行く、ということは子どもにとって時に楽しく、時にはつらいこともあり、それなりに成長を遂げながら過ごしていけるのであればそれでよいとしても、学校へ行きたくても行けない子どもたちにとって、無理にでも登校させて教育を受けさせるというとらえ方をすると、なお一層つらい状況へと追いやるだけである。つまり、現在の自分では、この状況の中へは出て行けない、と感じている子どもたちが自らの身を守るために発見したひとつの方法と言えるのかもしれない。しかし、この児童期から青年期という一生涯の発達の中でもさまざまなものを学ぶ時期において、集団から離れていることの負担は大きいと考えられる。たとえば、遠足、修学旅行などの集団体験や対人関係、知的学習など、一見するとマイナスばかりが多いように見える。「不登校」という言葉自体も、登校していない、という意味であり、学校を中心においた概念である。そのため、学校との関わりの中で、行っていないという状態を示しているに過ぎないのである。つまり、学校にはいない対象ということを示しているだけの概念である。そのため、そこにいない誰かが存在しているところについては何も含んでいないので、ある対象の一面だけを記述している概念であるといえよう。この点では、藤山(1999)が「ひきこもり」という言葉にある種のバイアスがあり、「本来あるべきところから退いている」ものであり、周囲の人との関わりから退いた不自然な状態にあるということを前提としている言葉であることに言及していることに通じるものがある。

つまり、登校できない、学校に行くことではなしえない何かを抱えている子どもにとっては、行けない、という学校での不在の部分だけが強調される結果が生まれるのである。

2. そこにはいないだれかのことを考えること

このように、そこにはいない誰かのことを考える、という視点と14万人という不登校の子どもたちの数について理解するうえで、ひとつの素材を提示して検討してみたい。しかし、ここでは素材そのものを提示することはできないため、要点だけを示すことにする。素材は、2001年の人気アイドルグループSMAPのライブコンサートの映像である。このグループのコンサートツアーは、ある時期から1人のメンバーは不登校の子どもたちが体験している心理的な状態と同じように“出演したくとも出演できない”という事態に至ったことから、残り4人のメンバーだけで公演が続行されることになった。東京ドームの最終公演の様子が、ビデオとDVDに納められており、この中にステージ上の4人のアイドルの歌い踊る姿と呼応しあい、酔いしれている5万人

の観客の様子が映し出されている。5万人という数字だけでは、実感が湧かないが、映像を見ることで圧倒されるほどの人数であることを理解することができる。特に、出演できなかったメンバーの顔が4人の着ているTシャツにプリントされていることは目をひき、そこにいない誰かのことを、ステージ上の4人のアイドルも、5万人の観客も共有していることを見て取ることが可能である。つまり、そこにいるはずの誰かがいない、ということは、時に大きな存在感を与えている。これを学校という場の出来事の置き換えだとして考えると、ある教室にいない誰かのことは、クラスの子どもたちにも、担任の教師にも、当然ながら自宅で子どもを目の前にしている保護者にも大きな心理的なインパクトを与えていることを理解することができる。そこに「いない」ことは「いる」以上の迫力を伴っているのである。そして、その1人がどのように扱われるのかを、そこにいる子どもたちは見ていることまでも思いを馳せるための素材ともなりうるのである。また、14万人という不登校の子どもたちの人数はこの約3倍であり、数をより実感と近いところで理解することも可能にするのである。

このように、不登校という現象は、不登校状態にある子どもひとりだけの出来事にとどまらず、その周囲にいる子どもたちにも大きな波紋を投げかけているという視点からの理解が必要である。しかし、さらに重要なことは、フィルムに映し出されている5万人の観客の1人一人の顔が違いうように、同じ「不登校」という名前ではばれている子どもたちも、その1人1人が異なる独自の存在なのである。「去年、不登校の子どもを担当したから、大丈夫です」と担任が述べた場合、安心する保護者もいる一方で、匿名化されている子どもの存在について不安を感じるかもしれない。

さらには、この14万人の背後に14万人の担任教師がおり、保護者やその関係者が存在しているのである。つまり、そこにはいないだれかのことをより多くの人と考えている、または考える機会を与えられているととらえることができる。

3. 理解の視点

そこには「いない」という側面と、一方ではどこかに「いる」という側面という不登校の子どもという対象のもつ2面性を同時にみていくことは、「行きたい」でも「行けない」という2つの自分の気持ちの間に揺れている存在としての不登校の子どもたちの理解を豊かにすることができる。いないことだけが問題なのではなく、どこかにいることが確かなのであるから、いかにどこかに安心している場所を見つけることができるか、または提供できるか、という援助的な視点ともつながるからである。人と交流する一方で、ひとりであることを求めるといひきこもり心性のアンビバレンスに援助者がもちこたえることについて藤山(1999)は言及しており、いない対象という面だけではなく、一方にはいる対象であるという視点をもつことで、これまでにもとらえられてきている不登校の子どもの理解を、外的な世界とのつながりをもった対象として理解することも可能にするのである。

Ⅲ. 子どもが不登校になったときに起きること

多くの子どもたちは「行きたい」けれど「行けない」状態にあり、前日には登校の準備までしている。時には、「明日は登校する」という約束を保護者や教師と結ぶこともある。けれど、当日の朝になると腹痛、頭痛や足がすくむなど身体症状が現れる場合や、起きることができずに結果的に登校できないこともある。事前に約束をしていたために、「約束を破った」という罪悪感を伴う。そのため、約束はしないほうが良い、と唱えている臨床家も多い。

不登校の初期には、朝は調子が悪く、午後になると元気になるため、ずる休みではないかと疑われることにもなる。病院へ行っても身体的に異常がない、と言われて、精神的なものが関わっているかもしれない、ということからカウンセリングなど心理的な援助施設を来談する場合も多い。この身体症状の意味は個別の事例ではさまざまに理解することができるが、学校を休みむには「病気になる」という理由でもない限りは難しいから、ということでもある。

多くの不登校の子どもたちは、次第に朝起きることができなくなり、昼夜逆転の生活となり、朝起きて夜に眠るといった一般的な生活リズムとは逆の生活を送る。つまり、これまでの生活の中で身につけてきた外界と自己との関わりのパターンを変えているのであり、いわば「垢落とし」として捕らえることも可能であろう。これによって、新たな外界との関わり方を模索するという、独自の時間体験が不在である期間において始まっているのである。

一方、保護者にとっては、学校にはいない存在であっても、いつも自宅にいる存在という違いをみせることになる。そして、今この時間自宅にいる、ということから、子どもが学校にいけなかったのは自分の責任なのではないか、と考えて自責的になり、保護者としての挫折感をいただくことが多い。この点では、学校の教師も同様の状況に置かれることも多く、「不登校を出した教師」として周囲の視線を浴びるという状況は現在でも起きているできごとである。このときに、保護者や担任などが感じている、居心地の悪さ、挫折感などは、子ども自身の情緒体験ともつながりのあるものである。しかし、多くは、この感情を一人で抱えることは困難なので、誰かの責任問題として、外界へと投げ出され、責任追及がはじまることも多い。

しかし、カウンセリング過程において、親が自らの趣味を再開するなど、子どもの不登校のことだけにとらわれることが少なくなると、子どもも動き出すことが多いことは臨床家の間でよく語られることであるが、筆者の担当した事例でも同様のプロセスをたどった事例もある。つまり、とらわれから、解き放たれていくプロセスは相互的であり、「自律の相互性」(増井、2002)としてとらえられている。つまり、対象がいないという一面ではなく、自宅にはいる、という両側面をとらえることが可能となっていく過程として理解することができる。

IV. そこにはいない対象がいるための空間と時間を保証すること

1. 2つの自分と対象の不在

学校に「行く一行かない」の2分法ではなく、この両面を不登校の子どもの心的世界として理解することが重要であることは、これまでも指摘されている視点である。この視点から考えると、『明日は学校に行く』と保護者や教師と約束した子どもが当日の朝になると足がすくんだり、起きることができずに登校できなかつたり、という現象を理解可能なものになっている。行きたい自分の一方に、行けない自分が存在しているからである。この2面性は、そのまま、学校という場所にはいない対象と、自宅にはいる対象という対象の2面性ともつながっている。これは、外的な空間に示される対象の2面性ということもできよう。

つまり、こころの2重構造としてとらえることもできる。心には表もあれば裏もあり、心が2重に構造化されているのである。不登校の子どもたちは、「朝から登校しなければならない」という思いが強過ぎて、ずっと学校に存在することにとらわれていることが多い。つまり、“うまいさばかりかた”ができないといえよう。しかし、多くの大人は「居眠り」というこの場にいながらにして居なくなることができる方法を身につけている。つまり、そこに居場所があるからこそ居眠りは可能なことであり、学校に心理的な居場所のない子どもにとって居眠りなどできるはずはないのである。つまり、表を取り繕うことができないのであり、裏と表のバランスが崩れていることになる。つまり、自己を2重構造化し、対象の2面性に耐えうるものが、不登校の子どもへの援助であるとも考えることもできよう。

2. そこにはいない誰かのいるところ

学校にはいなくても、他のところに不登校の子どもたちはいる。そこで、どのようなかかわりをするかが重要である。ひとつの方針として、わからないことは子ども本人に聞いてみる、という意外に単純でありながら重要な視点が臨床家たちの共有された発想であり、増井(2002)は、進学などの現実問題や登校するのに必要な周囲の援助について、本人に尋ねてみるということの重要性を指摘し詳しく述べている。この「わからないことは、相手に聞いてみる」というかかわり方は、臨床的であり、なおかつそこにいない誰かのいるところでの関わり方を示している。必要なのは時間と空間と見守ってくれる誰かが存在していることである。

しかし、不登校の子どもたちにとって、学校を休んでいることで、自宅で安心して休んでいるわけではない。休みながらも授業のことや友だち関係のこと、休んでいる自分がどのように思われているかに強く頭を痛めている時期がある。さらに、そこにいるはずの人がいないことは、自宅には子どもがいることになる保護者にとって「申し訳ないこと」「悪いこと」だという感覚を引き起こす。それゆえ、学校にいないこと、つまり欠席するという連絡を何日も続けて保護者が学校にするという行為は、負担なものとなる。その一方で、学校の内にいるものにはこの負担感はずいぶん軽いものである。この点を認識しておくことで、毎回の欠席ごとに連絡がないこ

とや、時に事務的で冷たいようにも感じられる電話連絡や、一見すると攻撃的な口調での連絡の背景にある、保護者の気持ちを理解しやすいものにする。学校の内部にいるものが自覚的であるか、ないかによらず、教師または学校という存在は絶対的な権威性は薄れてきているとはいえ、やはり権威として、その外のものにはとらえられているのであり、学校にいるものからの一言は、保護者の側の罪悪感とも重なって、何か責められているように感じやすいことも留意点のひとつである。特に、欠席が長期化した場合には、どのように連絡を取り合うのかを話合うこともこの負担を軽減するのに役立つことは多くの臨床家たちが来談者との間で生み出した知恵でもある。

IV. 不在の対象にとってのカウンセリング

学校場面にはいない誰かにとってカウンセリングという場はどのような機能を果たすのであろうか。ひとつは、安心して悩むことのできる時間や空間を提供することである。つまり、ここでは、ここにいる対象として確実に存在できる場所、つまり彼らが自分らしく存在することができる「居場所」(北山、1993)としての機能を果たすのである。この点では、学校復帰の過程で、学校内にある保健室や相談室がこのような子どもを抱える空間となりうることはさまざま論じられてきており、たとえば山崎(1997)は、不登校の事例ではないが、高校生の事例を用いて、学校の中で問題のある生徒を重層構造的に抱えていく試みについて述べている。

しかし、不登校の子どもたちは、カウンセリング場面にも登場しないことが多く、「いない対象」として保護者とカウンセラーの間で共有されて、このいない対象とどのように関わるのかについて保護者との間で面接が進められることになる。このように、本人自身が保護者にすすめられても来談しないことは、子ども自身が保護者とは独立した存在であることを示しているものとして臨床場面では理解されている。つまり、この段階ではカウンセリング場面は、子どもにとって居場所としての機能は果たしていない。

このように対象の不在という観点から不登校をとらえ直すと、カウンセリングの場で必要なのは、対象の二つの側面、つまり、「そこにはいない」と「そこにいる」という側面をつなぐことや、または、いたり、いなかったり、といったように二者択一的なところからより柔軟な存在の仕方へとその両面の関係性を修正することにある。いながら、いない、または、いないけれどいることもある、といったより柔軟な自己と学校および家との新たな対象関係の形成を援助することがカウンセリングでの課題のひとつとなるであろう。

V. まとめ

本稿では、不登校について、対象関係論の視点から論じた。特に、対象の不在という観点からだけとらえられがちな不登校について、この不在の対象が存在しているところ、という2面性のある対象としてとらえなおして検討した。それにより、学校という場には不在の対象であっても、他の場所、つまり多くは自宅ではそこにいる対象として存在することになり、2面性を備えた対

象としてとらえることができるようになり、不登校の理解をより全体的な対象へと向かうものとし、その援助にも有効な視点となることを検討した。単に「行く」「行かない」、ではなく、行くこともあれば、行かないこともある、いるけれど、いないこともある、といった学校や自宅という外界と自己とより柔軟な対象関係を形成することが、カウンセリングでの課題のひとつとなりうることについて論じた。

引用文献

河合隼雄（2000）：河合隼雄のカウンセリング入門．創元社．

株式会社ジャニーズ出版・ビクターエンターテインメント株式会社（2001）：LIVE qsm2．
ビクターエンターテインメント株式会社．

北山修（1993）：自分と居場所．岩崎学術出版社．

藤山直樹（1999）：ひきこもりについて考える．精神分析研究，43（2），130-137．

増井武士（2002）：不登校児から見た世界：共に歩む人々のために．有斐閣選書．

山崎 篤（1997）：境界例の生徒を学校内で抱えていく試み．心理臨床学研究，14（4），456-466．

〔付記〕本稿は、2002年9月26日山口市教育委員会主催「不登校問題を考える研修会」にて、『不登校の子どもの理解と接し方：今求められている子どもの心の健康』のテーマのもとに行った講演をもとに、加筆修正したものです。当日、貴重な質問をなげかけてくださった参加者の皆様にこころより感謝いたします。